

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語学習者のモシの使用に関する一考察：
KYコーパスにおける学習者の第一言語・習熟度別の
違いに着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): overuse, adverb, conditionals, L1 作成者: 市江, 愛, ICHIE, Ai メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003517

日本語学習者のモシの使用に関する一考察

——KY コーパスにおける学習者の第一言語・習熟度別の違いに着目して——

市江 愛

国立国語研究所 日本語教育研究領域 非常勤研究員

要旨

本研究は産出面におけるモシの使用頻度に通言語的影響 (Crosslinguistic Influence) がみられるのか、それは習熟度によって異なるのか明らかにすることを目的とし、KY コーパスを用い、日本語学習者の第一言語 (L1)・習熟度別にモシの使用頻度を分析した。その結果、上級ではL1による差はなかったが、中級ではL1による有意差があり学習者のL1により使用頻度に差があることが明らかとなった。また、事実的な条件や条件形式以外にモシを過剰使用するという傾向はどの学習者にもみられたが、その中でも特に中国語をL1とする日本語学習者に強くみられる傾向であることが分かった。さらに、事実的な条件での使用は一般・恒常や習慣・反復といった多回の場合にのみ使用されており、教育現場で導入する際に注意が必要であることを指摘した*。

キーワード：過剰使用、副詞、条件表現、条件文、L1

1. 問題の所在と研究目的

日本語学習者が条件表現を習得する過程で、モシが特徴的に使用されたり、理解に影響を与えることが指摘されている (横瀬 2001, 大関 2008, 花井 2018, 市江 2021 等)。そもそも日本語の条件表現は、仮定的な表現と事実的な表現の双方を表すことができるという特徴がある。本来、仮定的な概念と事実的な概念は対立しているものであるにもかかわらず、それを同じ言語形式で表現できるのである。他の言語をみても、日本語のように假定と事実の双方を同じ言語形式で表せる言語もあれば異なる言語形式を用いるところもあり、その表現体系は言語によって異なる。一方、モシというのは条件表現などの仮定的な表現と呼応し、仮定的な場面でしか用いることができない。それにもかかわらず、日本語学習者が事実的なものや本来呼応できない言語形式と一緒にモシを使用する例がみられている。

このような背景から、日本語とは異なる表現体系を第一言語 (以下、L1) に持つ日本語学習者が条件表現を習得する過程で、假定と事実という概念の違いとモシのもつ仮定性を混同してしまい、学習者特有のモシの使用につながっている可能性が考えられる。本稿では、そのようなモシの使用に通言語的影響¹がみられるか明らかにすることを目的とする。

* 本研究は 2018 年度日本語教育学会秋季大会におけるポスター発表「日本語学習者の「条件」表現と「モシ」一母語による違いから」、ならびに博士論文「第二言語として日本語の条件表現を習得する過程で現れる通言語的影響—概念差に着目して—」(東京都立大学, 2020 年)の一部をもとに加筆・修正したものである。

¹ 通言語的影響とは、ある言語における知識がその人自身の知識や他の言語の使用に影響を与えることである (Jarvis & Pavlenko 2007)。言語転移・母語の影響と同義とされるが、前者は 1980 年代からすでに否定的な見方がされている。また複言語社会が進む現代では母語と L1 が一致しないことも多い。そのため、本稿

2. 先行研究と研究課題

日本語の条件表現には、仮定的な表現と事実的な表現が存在する。ト、バ、タラ、ナラに代表される日本語の条件表現は、細かな違いがあり受容されにくいものもあるが、多くは仮定的なものと同様の事実的なものの双方を表すことができる。本来、仮定的な概念と事実的な概念は対立しているものであるにもかかわらず、それを同じ言語形式で表現できるのである。

しかしながら、他の言語では日本語とは異なる表現方法のところも多い。たとえば、韓国語は日本語と同じく仮定的な条件も事実的な条件も「-으면 (-umyen)」で表現できるが、英語では仮定的な条件は条件節 *if* で、事実的な条件は時間節 *when* を用いる。さらに、中国語では仮定的な条件では「如果～就 (ruguo ~ jiu)」, 事実的な条件には「只要～就 (zhiyao ~ jiu)」や「一～就 (yi ~ jiu)」などが用いられる。

このように学習者の L1 で異なる表現体系を持つ場合、第二言語（以下、L2）への影響はみられるのであろうか。実際に、L2 として日本語を習得する過程では、ある特徴的な傾向がみえてきている。それが条件表現と呼応するモシという副詞に関する傾向である。『日本国語大辞典 第二版』によると、モシは「(仮定表現を伴って) 現実には存在しない事態を、仮に存在したらと想定する気持を表わす (p.1269)」。副詞のためモシ単独では使用されず、「仮定的な場面」で、条件表現などの「仮定的な表現と一緒に」、「仮定的な文」で使用されるのである。それにもかかわらず、日本語学習者は事実的な条件で使用したり、本来は呼応しない表現と一緒に使用している様子が複数の先行研究で指摘されている。

横瀬 (2001) では、自然習得者、教室学習者に共通して、目標言語形式を使用する前段階にモシ～と表現したり、接続辞とともにモシ～タラ／カラ／テと表現することが指摘されている。また、学習者の習熟度では初級、中級、上級すべてでみられており、学習者の L1 は、英語、中国語、韓国語、インドネシア語とさまざまである。大関 (2008) では、ロシア語を L1 とする自然習得者 1 名の OPI 初級の上から中級の下における縦断研究を行っている。そこでは、横瀬 (2001) 同様、目標言語形式の前段階として、確定条件・仮定条件ともにモシモ～が使用されていた。その後習得が進むにつれ、確定条件では～タラで、仮定条件にだけモシモを付随させ、モシモ～タラで表現する過程が観察されている。これらの先行研究は L1・習熟度・対象者数の点において検討の余地があるが、花井 (2018) では L1 を中国語、習熟度を OPI で初級から超級に要因統制をした上で、ストーリー描写タスクを行っている。その結果、日本語母語話者はモシの使用が皆無であったが、学習者は上級・超級になってもなお高い割合で仮定的「条件」の場面でモシを使用していた。このことから、学習者は 4 形式² だけで「条件」を表現するのではなく、「モシ + 4 形式」で「条件」を表現する可能性が指摘されている。さらには、「条件」の習得過程において、特に中級から上級にかけて、事実的な条件にもモシを過剰使用することや、カラ・テなどの 4 形式以外の接続辞や名詞修飾節などの条件形式以外にも過剰使用する傾向を明らかにしている。

究ではより中立的な立場を示す「通言語的影響 (Crosslinguistic Influence; Kellerman & Sharwood Smith 1986)」を一貫して用いる。

² 花井 (2018) では条件形式のト、バ、タラ、ナラを総称して 4 形式と呼んでいる。

以上のように、複数の L1・習熟度に共通して、モシという語句が「条件」を表現する際に用いられている。特に花井（2018）では、学習者の L1 や習熟度を統制したうえで使用傾向を明らかにしており、その結果からはモシと「条件」の習得との関係が示唆されているのは興味深い。しかしながら花井（2018）は L1 中国語話者のみを対象として、このモシの使用傾向が L1 中国語話者特有のものなのか、それとも学習者の L1 にかかわらず共通してみられるのかという課題が残る。先行研究の結果からも分かるように、モシはさまざまな L1・習熟度に渡って使用されており、L1・習熟度とモシの使用が条件表現の習得とどのように関係しているのか明らかにする必要がある。

さらに、産出面だけでなく、理解面でもモシの L2 習得に与える影響が指摘されている。市江（2021）では、四つの異なる言語を L1 にもつ日本語学習者を対象に、モシが文頭にある場合、モシが動詞前にある場合、モシがない場合の 3 条件で仮説条件文の自己ペース読文実験を行っている。その結果、モシの位置は関係ないが、モシがあることで読み時間を速くし正答率も高くなること、さらにそれは L1 に関係なく、学習者に共通した傾向であることを明らかにしている。

このように、産出面におけるモシの使用傾向はまだ断片的にしか報告されておらず通言語的影響を明らかにできていないが、理解面では通言語的影響はないことが指摘されている。言語の理解と産出は明らかに異なるメカニズムであると言われており（Straight 1976, Berent 1985, Levelt 1993, 小柳・峯 2016 等）、理解面で通言語的影響がみられないからといって、産出面でも同様とは限らない。また、Odlin（1989）や奥野（2005）が指摘するように、L1 が異なる学習者グループを少なくとも二つ、もしくは三つ以上対象に分析しなくては、本当に通言語的影響かどうか見極めることはできず、十分に分析がなされているとは言えない。産出面においても習熟度を統制した上で、L1 が異なる複数の学習者グループにまたがって検証する必要がある。さらに、先行研究では学習者は本来モシを使用することができない事実的な場面でも使用すること、カラやテといった条件形式ではないものと一緒に使用することが指摘されている。モシが使用される場面が仮定的か事実的か、呼応する言語形式が条件形式か否かといった観点も含めて分析する必要がある。そこで本稿では、モシの使用頻度に通言語的影響がみられるのか、それは習熟度によって異なるのか明らかにすることを研究課題とする。その際、モシが使用される場面と呼応する言語形式に着目し分析をする。

3. 手続き

調査は KY コーパス（山内 1999）を用い、韓国語、中国語、英語を L1 とする学習者（以下、L1 韓国語話者、L1 中国語話者、L1 英語話者）を対象に、モシの使用頻度を L1・習熟度別に分析する。KY コーパスを選定した理由は、OPI で習熟度を統制したうえで、三つの異なる言語を L1 とする学習者の産出を比較できるため、通言語的影響を考察するのに適していると考えたためである。

分析対象は順接条件で使用される「もし、もしも、もしさ、もしね」等であり、本稿ではモシと表記する。「もしかしたら、もしかすると」等の複合語に含まれるモシは対象外とする。また、

学習者のモシがインタビュアーに引張られて産出された可能性もあるため、直前のインタビュアーの発話を確認したところ、KAH01, KS09 で該当した発話があったが、直接影響を受けたものではなく分析対象に含めた。

本研究では、モシが使用される場面が仮定的か事実的吗、呼応する言語形式が条件形式か否かに着目をする。本研究でいう条件形式とは、順接条件の「ト、バ、タラ、ナラ、場合」であり、テモ等の逆接条件は含めない。条件の分類は、前田（2009）を参考に条件文のレアリティーが仮定か否かを基準に、仮定的な条件と事実的な条件の二つに大別した。前者は反事実、仮説を指し、後者は多回的な一般・恒常、反復・習慣、一回的な連続、きっかけ、発現、発見を指す。また、前田（2009）によると、並列・列挙、評価的用法、終助詞的用法、後置詞的用法、接続詞的用法は、仮定性も因果関係も持たず、またほとんどが固定的でイディオマティックであるため「条件」とは呼びにくいとされており、本研究でも対象外とする。特に評価的用法については松木（1990）が、後置詞的用法については高橋（1983）が詳細に記述しており、それらに記載ある形式はすべて研究対象外とした。なお、名詞に接続するナラについては、本来は連用節を作らないため研究対象外となる。しかし、タラ・バ・トが動詞、形容詞にしかつかないのに対し、ナラは名詞にも後続して仮定条件を表し（北条 1964）、「～ナラ」と「～ナラバ」はほとんど完全に置き換えることができる（国立国語研究所 1964）。さらに、BCCWJ を分析した前田（2017）ではナラの後続は約 5 割が名詞であるとその多さが指摘されている。また、Processability theory（Pienemann 1998）で言われているように、学習者はより単純な構造から L2 習得がなされていくため、構造的により複雑な連用節よりも「名詞+ナラ」という名詞句で「条件」を表せるのであれば、それを活用することは想像に難くない。以上のことから、「条件」の習得を分析するためには、連用節を構成していないからといって、「名詞+ナラ」を研究の対象外とするべきではないと考え、対象に含めた。ただし、前田（2009）で非条件的とされている掲題的な用法のナラは、「条件」ではないため本研究の対象外とする。

4. 結果と考察

4.1 L1・習熟度別の傾向

L1・習熟度別のモシの使用頻度を表 1 に示す。習熟度別のモシの総頻度は、初級 4 回、中級 21 回、上級 44 回、超級 13 回であり、中級・上級では L1 韓国語話者、L1 中国語話者、L1 英語話者のすべてでモシが使用されていた。L1 別でみると L1 中国語話者 43 回、L1 英語話者 24 回、L1 韓国語話者 15 回と L1 中国語話者が最も多かった。

各習熟度でモシの使用頻度に統計的有意差がみられるか確認するため、モシの使用回数が 0 回、1～2 回、3 回以上の頻度別人数に置き換えた。そして、3（頻度別人数:0, 1~2, 3 回以上）x 4（習熟度:初, 中, 上, 超）のフィッシャーの正確確率検定を行ったところ有意であり（ $p < .05$, $V = .29$ ）、ボンフェローニの方法による多重比較の結果、初級と上級でのみ有意であった（ $p < .0083$, $V = .49$ ）。つまり、花井（2018）などの先行研究でモシの特徴的な使用がみられ、本研究で用いた KY コーパスでもその使用が多くみられている中級と上級の間には有意差（ $p = .0599$, $V = .31$ ）がみられなかった。

表1 L1・習熟度別モシの使用数

習熟度	L1 韓国語話者 (n=30)	L1 中国語話者 (n=30)	L1 英語話者 (n=30)
初級	0	0	4
中級	1	19	1
上級	6	24	14
超級	8	0	5

そこで、中級・上級それぞれで、L1による差異がないか確認するため、3（頻度別人数：0, 1~2, 3回以上）×3（L1：韓, 中, 英）のフィッシャーの正確確率検定を行ったところ、上級では有意でなかったが（ $p=.08, V=.38$ ）、中級では有意であった（ $p<.05, V=.44$ ）。しかしながら、ボンフェローニの方法による多重比較ではL1韓国語話者とL1中国語話者（ $p=.0198, V=.62$ ）、L1韓国語話者とL1英語話者（ $p=1.00$ ）、L1中国語話者とL1英語話者（ $p=.0198, V=.62$ ）のどの水準も有意ではなかった。

以上の通り、モシの使用頻度について、中級ではL1による差があるが具体的にどの話者に差があるのか統計的に明言することができなかった。一方、上級ではL1による差はなく、モシの使用頻度はL1に関係ないことが明らかになった。

4.2 場面・形式別の傾向

では、具体的にどのようにモシが使用されているのだろうか。モシが事実的な条件と仮定的な条件のどちらで用いられていたか、どのような言語形式と一緒に使用されていたか、表2に示す。

表2 条件の種類・形式別モシの使用数内訳

習熟度	形式	L1 韓国語話者		L1 中国語話者		L1 英語話者		計	
		仮定	事実	仮定	事実	仮定	事実	仮定	事実
初級	条件形式	0	0	0	0	0	0	0	0
	そのほか	0	0	0	0	2	2	2	2
中級	条件形式	1	0	4	5	0	0	5	5
	そのほか	0	0	6	4	1	0	7	4
上級	条件形式	4	0	16	6	13	1	33	7
	そのほか	2	0	1	1	0	0	3	1
超級	条件形式	5	3	0	0	5	0	10	3
	そのほか	0	0	0	0	0	0	0	0
計		12	3	27	16	21	3	60	22

まず、仮定的な条件での使用は、条件形式と呼びさせているものもあったが（以下、例文（1））、条件を表さない言語形式と一緒に使用している例や（2～3）、接続表現を用いていない単文であるにもかかわらずモシが文頭に置かれている例もみられた（4）。（2）では、「もし山いく寒いときとても寒い」というように「とき」と一緒に使用し、さらに「もし遊ぶことは」というように「は」と一緒に使用していた。このような条件形式以外との使用は、中級では21回中11回と52%を占めていた。そして上級では44回中4回（9%）に減少し、超級での使用はみられなかった。

この中級で条件形式以外にモシを付随させる傾向は、L1 中国語話者が 11 回中 10 回と大半を占めていた。

以下、KY コーパスからの例文を示すが、下線部が当該部分、網掛け部分が当該部分と一緒に使用されている言語形式である。また、例文末尾の括弧内に、学習者 ID、条件の分類の順で記す。学習者の ID は KY コーパスで用いられているもので記し、条件の分類は仮定的な条件を H (Hypothetical)、事実的な条件を事実 F (Factual) で記す。学習者 ID の最初のアルファベットが学習者の L1 であり、K が韓国語、C が中国語、E が英語である。2 番目のアルファベットは学習者の OPI にて判定された習熟度を表わしており、初級が N (Novice)、中級が I (Intermediate)、上級が A (Advanced)、超級が S (Superior) で示されている。3 番目のアルファベットは習熟度の中でのサブレベルを表わしており、下が L (Low)、中が M (Mid)、上が H (High) である。ただし、超級にはサブレベルはなく、上級は「上級」と「上級の上」の二つに分けられているため、A のみか AH で示されている。

- (1) 女の子が、女の子もこのおん、男の子が気に入らなくて、うーと手を一緒に、一緒にも、とって、とって、とって、一緒に行く、女の子、もし 女の子が気に入らなくて、いらなくて、いらなくて場合は、女の子がごめんなさいって言って、男の子が一人で戻る番組です、(はー) 知っています [KIM01_H]
- (2) こどもとき、私たちはー、冬ときあまりー、あそびないなあ、(んー) んー、ちゅうご、んーセーアンのところはー、んー、海ないです、(うん) 山だけ、(んーんー) もし 山いくー寒いときとても寒いです、だからー、んんー、もし 遊ぶ、遊ぶことー、は、カラオケとー、これだけなあ [CIL03_H/F]
- (3) あーはい、あまり乗りません、もし (えーえーえーえー) お父さんの車、(ん) わたし乗りたいけど、(えー) わたしの車古いから、(ん) あまり乗たくない {笑い} [EIL05_H]
- (4) もし、もしー食べられますー、あー、にほん、んー、焼き肉いいですか [CIL03_H]

つぎに、仮定的な条件での使用か事実的な条件での使用かをみていく。まず分類基準についてだが、学習者の産出であるため当該文だけでは判断できないことも多く、そのような場合には前後の文脈を含めて判断した。たとえば、(2) は文法的に不明確であり条件文とは言い難いかもしれないが、前後の文脈から「もし山いく寒いとき」は仮定的な条件、「もし遊ぶことは」は事実的な条件に分類した。前者を仮定的な条件へ分類した理由は、前後の文脈から、「普段冬場は山へ行かないが、もし行ったらとても寒い」という内容の発話で、例え話として仮定的な文脈で話しているためである。後者の「もし遊ぶことは」は、「冬に遊ぶとしたらカラオケだ」と習慣的な行動を述べている場面であり、事実的な条件に分類するのが妥当だと判断した。

本来モシは、日本語の規範としては仮定的な条件で使用される。しかしながら、すべての習熟度で、事実的な条件にも使用されていた (5)。特に、中級では 21 回中 9 回 (43%) と最も多く、上級でも 44 回中 8 回 (18%)、超級でも 13 回中 3 回 (23%) と上級、超級でも使用されていた。超級の 3 回は同じ KS01 の産出であった (6~7)。また、L1 別では L1 中国語話者の使用が目立

ち、中級では9回中9回とすべてL1中国語話者の使用であり、上級でも8回中7回がL1中国語話者の使用であった。

- (5) よく、んーと、もし、友達が誘ったら、あの、よく行きます [CIM05_F]
- (6) そういう問題は出てくると思うんですが日本とはちょっと違う状況というのがあるんですよ、あの、もし自分の親が年とって、〈んー〉あの、ほんとに身動きができないとか、〈えーはい〉もうね、あの、おふたりで生計が立てられないっていう、〈んー〉状況になってしまいますと、子供達が面倒見ますね、韓国では、〈んーんー〉あの儒教っていうのが、〈あー〉かなり生活に根強く入ってますので [KS01_F]
- (7) というのは、まー、文学ももし国文学科だったら、〈ええ〉ほんとに国文学っていう、それを一筋をまーたどって、〈んー〉いけばね、〈んー〉勉強していくんですけど、この国際協力の場合は、〈んー〉社会学的なものやらなきゃいけない、〈あー〉宗教学的なものも、〈あー〉やらなきゃいけない〈んー〉し、そして、まー文学的なものとか、〈はい〉それを全部一緒にして、〈あー〉やっていかなきゃ〈あーあー〉いけない、っていうのがあるんですね、その点むずかしいです [KS01_F]

以上のことから、先行研究で指摘されていた事実的な条件や条件形式以外にモシを過剰使用するという傾向は、本研究の結果からも支持された。そしてそれは、L1中国語話者に強くみられる傾向であることが分かった。

ただし、日本語のモシが必ず条件形式と一緒に使用されなくてはならないのかという点は、検討が必要である。もちろんカラヤノデといった接続辞と一緒に使用されるのは明らかに不自然だろう。一方、「もし雨が降った時、遠足は中止です」は不自然と感じられるかもしれないが、「もし雨が降った時は、遠足は中止です」のように「時は」にすればおちつきがよくなる。また、「もし何かお気づきの方は、遠慮なくお知らせください」のような表現も存在し、モシが必ずしも条件形式と一緒に使用されるわけではないことが考えられる。このような「もし…は」の表現については工藤(1976)でも指摘されており、間違った用法とは言い切れない。しかしながら(2)の例のような「もし遊ぶことは」といった表現はやはり不自然であり、どのような場合にはモシが条件形式ではないものと一緒に使用できるのか明らかにする必要があるだろう。この点については今後の課題としたい。

4.3 事実的な条件での傾向

2節で述べた通り、モシは規範的には仮定的な条件で使用される。しかしながら、どのL1・習熟度でも事実的な条件でモシが使用されており、計22回の使用がみられた。そして、とりわけL1中国語話者が事実的な条件にもモシを過剰使用する傾向がみられた。では、どのような用法のときに使用されているのであろうか。前田(2009)にならい、一般・恒常、反復・習慣、さまざまな状況(連続、きっかけ、発言、発見)に分類をし、事実的な条件へモシを過剰使用する際の傾向をみていく。なお、どの習熟度での産出かわかるようにこれまでと同様にL1・習熟度

別に示すが、紙幅の関係上、産出がみられなかった習熟度については記載しない。なお、これらの用法を分類するにあたり、日本語学習者の発話であるため、分類が難しいものもあった。そのときは4.2と同様に、文脈からどのような発話内容であるかを踏まえた上で分類を行った。なお、以下例文末尾の括弧内には、学習者のID、分類結果の一般・恒常か習慣・反復の順で記す。

表3 事実的な条件へのモシの使用数内訳

事実的な条件	L1 韓国語話者		L1 中国語話者		L1 英語話者	
	超級 (n=5)	中級 (n=10)	上級 (n=10)	初級 (n=5)	超級 (n=5)	
一般・恒常	2	2	5	0	1	
習慣・反復	1	7	2	2	0	
さまざまな状況	0	0	0	0	0	

表3に日本語学習者の事実的なモシの使用数の内訳を示した。まず、さまざまな状況での使用はどの言語をL1とする学習者にもみられず、すべての使用が一般・恒常、習慣・反復であり、使用数はそれぞれ計10回、計12回であった。

超級のL1韓国語話者の計3回の使用は、4.2で述べた通りすべてKS01の産出であり、一般・恒常で2回、習慣・反復で1回であった。一般条件というのはレアリティーが超時であり、事実的な条件の中でも最も仮定的レアリティーに近いので、超級になっても習得できない学習者がいるのだろう。また、初級での使用はL1英語話者に2回みられており、どちらもENH01一人による産出であった(8~9)。この2例は、インタビュアーが毎日の生活を話すように求め、それに答える場面である。仕事と日本語の勉強の時間について話しているが、どちらもモシと「でも」を使って日常的な行動を表現しているため、ENH01独自のストラテジーがみてとれる。

- (8) それから、んおそうじ、と、〈うん〉なに、もし 昼仕事あるでも、英語の先生と日本語勉強ある [ENH01_習慣・反復]
- (9) よる夜は仕事あります、でもアパートで少しだけある、もし あるでも 日本語べん、日本語の勉強、たぶんない [ENH01_習慣・反復]

つぎに、一番使用数の多かったL1中国語話者についてみていく。中級では習慣・反復が7回、一般・恒常が2回であった。習慣・反復の例は4.2の(2)で挙げたような例である。一般・恒常で使用された2例は、次の(10)と(11)である。(10)はバスケットボールのルールを説明している場面で、ボールがゴールに入ったら点がもらえるということを説明している。一方、(11)はロールプレイのタスク内の発話であり、隣人に静かにしてほしいと文句を言う場面である。隣人に文句を言ったところ、今日は隣人の誕生日だと言われ、誕生日なら1~2回だけなので大丈夫ですと言っているところである。誕生日は1年に1回というのは決まっていることなので、一般条件に分類される。相手が誕生日だと言っているのに対し、「もし誕生日だったら」ということで、相手の発言を疑っているような言い方にも感じられる。これは、有田(2008)で指摘されているように、相手が発言したことに対し、わざわざモシと言うと、まるで疑っているよ

うにとられてしまうので、疑いを表すという意図がない限り、モシが出現しない方がいいだろう (12)。

- (10) たかいのものは、〈はい〉あのー、ボールをそのなかに投げて、〈ええ〉もし当たる、入れます、〈はい〉あの、ボールは、いれ、たら、点数が、あげます [CIH02_一般・恒常]
- (11) それじゃ、あん大丈夫ですよ、〈ええ〉ええとー、んー、でもー、いつもーそんなにー、あー、大きくない、とほうがいいとおもますけど、〈ええ〉もし誕生日だったらい、いち回とか2回だけでも大丈夫ですよ、〈う、ええ〉{笑い} あのおんほんとにすみませんでした [CIM05_一般・恒常]
- (12) A: 今度の言語学会の夏期セミナーに参加することにしたの。
B: あら、そうなの。(??もし) あなたが行くなら、私も行こうかな。(有田 2008)

そして L1 中国語話者の上級では、習慣・反復は 2 回に減少するが、一般・恒常は 5 回に増えている。上級での一般・恒常の例は、(13) や (14) である。(13) は日本の大学が通常 4 年間で卒業するというのは決まっていることで、(14) では日本の伝統的な考え方を説明している。

- (13) ぼくらば日本へ来る目的は、やっぱり一番大切のは、あの、日本語ですよ、〈ええ〉もし4年間の時間あれば、〈うん〉日本語の方に、あの、努めて、あの、上達になりたいですね [CA02_一般・恒常]
- (14) やはりこれは日本の伝統的なあのー考え方からきてるでしょう 〈んーんー〉たぶん、〈んー〉あの男の人の方が もし家事をなんかすると、〈んー〉ちょっと、あの自分の、身分〈えーえーえー〉にふさわしくない〈あーはいはいはい〉という考え方があるかも [CAH06_一般・恒常]

以上のように、KY コーパスからの事実的な条件へのモシの使用を用法に分けて分析したところ、どの言語を L1 にもつ日本語学習者にも、一般・恒常と習慣・反復での使用しかみられなかった。前田 (2009) によると、事実的な条件は多回的なものと一回的なものに分けることができ、一般・恒常と習慣・反復は多回的なもの、連続・きっかけ・発言・発見といったさまざまな状況は一回的なものとされる。すなわち、日本語学習者が事実的な条件にモシを過剰使用するのは、多回的に発生するものだけという結果であった。

この多回的なものを英語で表現する場合について考えてみたい。2 節で、英語では仮定的な条件は条件節 *if* で、事実的な条件は時間節 *when* を用いると述べた。しかしこの多回的なものを表す場合は、*if* と *when* どちらも使えるが、それぞれの文の持つ意味が変わってくる。Reilly (1986) によると、*when* では、主節で表現されている事柄の発生について確実であるか、少なくとも話し手がそう予期しているということを暗示している。一方、*if* では、主節における事柄に関する話し手の推測や想像、すなわち可能性を表しているのである。つまり、主節での事柄や状態に対して、それが事実だと信じているか、ただ単に可能性として仮定しているかという話し手の態度が *when* と *if* の異なる点であるとしている。Reilly (1986) では先行研究を踏まえた上で、以下の

ように習慣的な二つの事柄が同時に発生する場合についても説明している。

(15) If Jamie drinks cranberry juice, he gets a rash. (Reilly 1986: 313)

(16) When Jamie drinks cranberry juice, he gets a rash. (Reilly 1986: 313)

(16) では *when* は習慣的な関係性を示す *whenever* に置き換えることができる。そして、(15) のように *if* 節で表現することもできるが、*if* を用いた場合は、習慣的な二つの事柄が同時に起こる可能性について言及している。つまり、cranberry juice を飲むつもりはないが、飲んでしまったら発疹が出てしまうのである。このように、(15) と (16) のような二つの事柄が習慣的に同時に起こる場合、*when* と *if* の意味範疇の重なりは大きいのである。

このように、事実的な条件の中でも多回的一般・恒常や習慣・反復というのは、通言語的にみると意味範疇の重なりが大きく、日本語の L2 習得において L1 の影響を受けている可能性がある。それがモシの過剰使用という形で表出しているのかもしれない。日本語では、事実的な条件へモシを使用することはできない。条件表現というのは、日本語の授業において、通常、その用法ごとにわけて導入されることが多い。その際、同じ条件表現であっても、一般・恒常や習慣・反復のときにはモシを使用できないと明示的に指導することが有効であろう。

5. まとめと今後の課題

本研究では KY コーパスを用い、日本語学習者の L1・習熟度別にモシの使用頻度を分析した。その結果、中級では L1 による有意差があるが、具体的にどの話者に差があるのか統計的に明言することができなかった。一方、上級では L1 による差はなく、モシの使用頻度は L1 に関係ないことが分かった。また、事実的な条件や条件形式以外にモシを過剰使用するという傾向はどの学習者にもみられたが、その中でも特に L1 中国語話者に強くみられる傾向であることが分かった。さらに、事実的な条件での使用は、一般・恒常や習慣・反復といった多回の場合にのみ使用されており、教育現場で導入する際に注意が必要であることを指摘した。

本研究の結果は KY コーパス、つまり OPI における発話データを分析したものである。花井 (2018) では「条件」をどのように表現するのか、function-to-form analysis の観点から分析を行う重要性が述べられている。学習者は既存の知識を駆使して、さまざまに自身の意図することを表現しようとする。そのため、学習者が「条件」の場面をどのように表現するか分析することなしに、日本語の条件表現の習得過程はみえてこない。そのため、本研究のようにコーパス上で出現したモシの使用頻度を分析するだけでは、産出面においてモシと条件表現の習得の関係を十分に分析できたとはいえない。今後、本研究で有意差が確認された中級に焦点を絞り、L1 中国語話者に通言語の影響がみられるのか、学習者の L1 と習熟度の統制を行なった上で「条件」の場面を設定したデータを収集し、function-to-form analysis の観点から十分な検証をしていきたい。また、モシは仮定的な条件で使用されるものであるが、どのようなときに使用されるのか、それが日本語母語話者と日本語学習者で異なるのかについても実証的に分析することで、日本語教育におけるモシの指導を探っていきたい。

参考文献

- 有田節子 (2008) 「あなたがそう言うから／なら別れることにするわ—理由も条件も同じコインの裏表」『言語』37(10): 76-83.
- 市江愛 (2021) 「モシは日本語条件文の理解を促進するのか—自己ベース読文実験を用いた文処理過程から—」『日本語教育』178: 94-108.
- 大関浩美 (2008) 「学習者は形式と意味機能をいかに結びつけていくか—初級学習者の条件表現の習得プロセスに関する事例研究—」『第二言語としての日本語の習得研究』11: 122-140.
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』東京：風間書房.
- 北条淳子 (1964) 「条件の表わし方」『日本語教育』4・5: 73-80.
- 工藤浩 (1976) 「『もし線路に降りる時は』という言い方」『言語生活』299: 84-85.
- 国立国語研究所 (1964) 『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊：分析』東京：秀英出版.
- 小柳かおる・峯布由紀 (2016) 『認知的アプローチから見た第二言語習得—日本語の文法習得と教室指導の効果—』東京：くろしお出版.
- 高橋太郎 (1983) 「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実編『副用語の研究』293-316. 東京：明治書院.
- 花井愛 (2018) 「日本語学習者は『条件』をどのように表現するのか—中国話話者の事実と仮定の表現差に着目して—」『日本語／日本語教育研究』9: 167-182.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的探究—』東京：くろしお出版.
- 前田直子 (2017) 「順接条件節『なら』の接続形態」『現代日本語研究』9: 23-39.
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2: 27-52.
- 山内博之 (1999) 「OPI 及び KY コーパスについて」『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』(平成 8-10 年度科学研究費基盤研究 (A) (1) 課題番号 08308019 研究代表：カッケンブッシュ寛子 研究成果報告書) : 238-245.
- 横瀬智美 (2001) 「異なった言語環境における日本語の習得—自然習得と教室環境での習得の比較から—」修士論文. 広島大学.
- Berent, Gerald P. (1985) Markedness considerations in the acquisition of conditional sentences. *Language Learning*, 35(3): 337-372.
- Jarvis, Scott & Pavlenko, Aneta (2007) *Crosslinguistic influence in language and cognition*. New York: Routledge.
- Kellerman, Eric & Michael Sharwood Smith (1986) *Crosslinguistic influence in second language acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Levelt, Willem J. M. (1993) Language use in normal speakers and its disorders. In: Gerhard Blanken, Jürgen Dittmann, Hannelore Grimm, John C. Marshall & Claus-W. Wallesch (eds.) *Linguistic disorders and pathologies*, 1-15. Berlin: de Gruyter.
- Odlin, Terence (1989) *Language transfer*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pienemann, Manfred (1998) *Language processing and second language development: Processability theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Reilly, Judy Snitzer (1986) The acquisition of temporals and conditionals. In: Elizabeth Closs Traugott, Alice Ter Meulen, Judy Snitzer Reilly & Charles A. Ferguson (eds.) *On conditionals*, 309-331. Cambridge: Cambridge University Press.
- Straight, H. Stephen (1976) Comprehension versus production in linguistic theory. *Foundations of Language* 14: 525-540.

資料

『日本国語大辞典 第二版』小学館

Differences in the Use of *moshi* among Learners of Japanese in the KY Corpus by First Language and Proficiency

ICHIE Ai

Adjunct Researcher, JSL Research Division, NINJAL

Abstract

In this paper, I aim to clarify cross-linguistic influences on the production of *moshi* among Japanese learners. To this end, I analyzed the frequency of *moshi* in the KY corpus, focusing on learners' first languages and proficiency levels. The results show that the frequency is significant for intermediate learners, but not for advanced learners. Further, although all learners tend to overuse *moshi* in factual conditional sentences and with forms other than the conditional particles, Chinese learners of Japanese seem to overuse *moshi* more frequently than others. In addition, *moshi* is only overused with factual conditionals in the case of generics and habits. Therefore, I suggest that this phenomenon should receive consideration in teaching.

Keywords: overuse, adverb, conditionals, L1